

※神戸新聞社の許可を得て掲載しています

申

戸

新

聞 (夕刊)

第43475号

2019年(平成31年)2月25日

2019年(平成31年)

2月25日

月曜日

夕刊

# 神戸新聞

神戸新聞社 〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7 <https://www.kobe-np.co.jp>

購読のお申し込み 0120・

時々、フランスで本屋をのぞくようになって、ヨーコ・オガワの本が目につくようになった。神戸新聞でも3カ月に1度の連載をしている小川洋子さんのことだ。フランスの装丁は不愛想で、むき出しの無地にタイトルだけという本も多いが、ヨーコ・オガワの本は違う。美しいカラーの表紙に謎めいたオブジェやこの世とあの世のあわいのような風景。封筒のような判型もエキゾチックだ。そんなたたずまいに魅了され、小川洋子を読んだことがなかったばかりは、ヨーコ・オガワはフランス語で読む作家にしようと思った。少しづつ本を買い集め、少しづつ読み進めて、オガワ・ワールドに入っていたが、同時に、表紙に小さな活字で、小川さんと並んで登場する名前に気づくようになった。ローズ＝マリー・マキノ。訳者の名前だ。作品を年代順に読んでいったが、この人は、初めから小川さんに伴走している。あ、ぼくはヨーコ・オガワを読んでいると同時に、ローズ＝マリー・マキノを読んでいるんだな。どんな

## 随想

### ローズ＝マリー・ヨーコ

寺田 匡宏

人なんだろう。そう思っていた。小川さんがエッセーで、彼女と会ったことを書いている。彼女は、どちらかという仕事として翻訳をしているようだ。とはいえ、翻訳とはある意味で文章を体の中に入れる作業で、彼女は、小川作品の仏訳のほとんどを手掛けているので、そこには、なにか通じるものがあるのだろう。

最近、「Haruki Murakamiを読んでいるときに我々が読んでいる者たち」という本が出た。村上春樹の英訳者たちをめぐる本だ。その伝で行くと、ぼくが、Yoko Ogawaを読んでいる時、読んでいるのは、ローズ＝マリー・マキノ。それとも、それはローズ＝マリー・マキノ・ヨーコ・オガワという作家なのだろうか。あの頃、ぼくが読んだ初期オガワのプールの水の感じや雨のにおい、独りぼっちの学生寮の孤独は、フランス語の霧の中にある。

(てらだ・まさひろ＝総合地球環境学研究所客員准教授)